

風景の首都

最終回

「楽しみ」「健康」を求める新風景

現代病のホリデー・ブルー 健康診断センターの増加

北京にスターバックス1号店が進出し、短期間で同コーヒーショップは街の風景の一部になった。そして最近の新しい風景に、「健康診断センター」が加わりつつある。競争社会への突入により、中国人の心と体の負担は確実に大きくなり、生活の多様化により、心のバランス調整や健康がキーワードとなってきた。

数年前から、中国メディアに「節後総合症」(ホリデー・ブルー)という言葉が踊る。世界を見回せば、多くの社会に存在する病気の一種だが、休暇を存分に楽しんだ後、無味乾燥なルーティンワークやプレッシャーの高いクリエイティブワークに復帰する際に、不安やプレッシャーにさいなまれる症状を指す。競争社会の現代病であり、中国社会が競争社会に突入している証である。

中国では、春節(旧正月)、労働節(メーデー)、国慶節の三大祝日を法律で七連休と定めたことで、観光業や小売業をはじめ、各種経済を刺激する効果があったといわれる。かつての祝日前には、街の商店は一律休業となったことから、中国人は買いためをして不便のないよう備えるのが常だった。しかし今では、「公休には給料を三倍支払う」という労働規定があるにも関わらず、商魂たくましいスーパーや百貨店は、従業員に休日出勤を命じ、バーゲンセールを実施。各種商戦が繰り広げられる。分散している祝祭日を連続化し、長期休暇にすることで消費を刺激しようという発想は、日本が祝祭日を週末または週の頭に移動する方式を採用したのと同じだ。

今年の労働節連休期間(五月一〜七日)に中国国内旅行をした観光客数は一億二〇〇〇万人に達し、前年同期比一六%増だった。観光収入は四六七億元で同二〇%増となり、観光客一人当たりの平均支出は三三五元だった。一部の観光都市での指定商店の売上は前年比一九・〇%増、外食産業の売



労働節の首都北京の風景

上は一九・七%増だったという(データ出典:二〇〇五年労働節旅遊統計報告)。

消える風景と生まれる風景がある。数々の胡同や古いアパートは、街の中心部から姿を消し、逆に、利便性を追求した新しい風景が生まれている。コンビニエンスストアばかり、コーヒーショップばかり。そして新たに生まれた風景に、健康診断センターがある。公立の北京市健康診断センターは昨年、設立四〇周年を迎えた。しかし、徴兵や入学、運転免許取得、結婚などの「特別診断」ではなく、健康管理を目的とした「日常診断」は、長く行われてこなかった。北京における「日常診断」は、一九九七年にスタート。二〇〇〇年には延べわずか三〇〇〇〇人が診断を受けただけだったが、翌〇一年には延べ二万三〇〇〇〇人に急増した。経済発展と

SARSによる健康意識の向上により、その後、北京での受診者数は増え続け、すでに延べ四〇〇万人(専門機関以外に病院での検診を含む)を超えた。

もちろん、市場が膨らめば弊害も生まれる。急成長した市場には、玉石混交の診断機関が乱立、北京市だけですでに五〇〇社以上がしのぎを削っているという。そのため市政府では、クオリティ確保の目的から、最低地面積や設置義務のある機器の指定、専門技師の配置などを細かく規定している。航天中心病院などと提携を結んでいる某日系企業は近く、中国初の移動式の健康診断車両を導入する。「健康の走る広告塔」として、街の新しい風景となる。

(杉山保)



北京の一等地・回民地区にある慈濟ヘルスケアセンター